

思想を解放せよ——思い込みに要注意

高原 明生

恥を忍んで告白すれば、私は十五年ほど前まで、「中国の改革開放は一九七八年に始まった」と学術論文にも書いていた。何の疑問も抱いていなかった。だって、みんなそう言っているぢやないか。いや待てよ、と考えるようになったのは、サブティカルを得て、落ち着いて資料を読めた時だった。中国共産党の公式の歴史において、分水嶺だと言われるのは一九七八年のいわゆる三中全会、すなわち第十一期中央委員会第三回全体会議と、その直前に開かれた中央工作会議だ。だが、それらの会議に参加した于光遠という、鄧小平に信頼された経済学者の回顧録を読んでいたら、目を見張ることが書かれていた。

年配の方は華国鋒という指導者を覚えているだろう。同年十一月に開幕した中央工作会議の冒頭で、華国鋒主席は翌七九年一月より全党の活動の重点を近代化建設に移すと発表する。その背景として文革による経済の停滞があったのは間違いない

日報が改革開放の四文字を初めて掲載したのは一九八四年のことだった。

こちらで皆さん、かなり思考が混乱しませんか。そういうことなら、改革開放が三中全会から始まったという後付けのナラティブを、一体どう理解すればよいのか。

八一年に華国鋒との権力闘争に完全勝利した鄧小平とその仲間たちは、自分たちの主導権確立を正統化するため、華国鋒の貢献を否定し、三中全会画期説を正史とした。だが、その後も国内改革や対外開放をめぐる争いが絶えなかった。後に作られた概念である改革開放は具体的な政策を指しているわけではない。それは、鄧小平の権威と権力を象徴するシンボルとして政治的に使われたのだ。

もちろん、三中全会と中央工作会議に意義がなかったわけではない。大きな意義は、毛沢東の決定や指示をすべて守らねばならないという「二つのすべて」を否定したことだ。神格化されていた毛沢東の否定が許されるようになり、鄧小平は中央工作会議の閉幕式で実事求是と思想の解放を強く訴えた。だが、長年にわたり刷り込まれた人々の考えは一朝一夕に変わりえない。紆余曲折を経て、市場経済が正式に認知されるのは一九九二年のことである。

皮肉なことに、今や人々は鄧小平の神話に囚われている。我々は、中国共産党の言説を繰り返し聞かされているうちに、改革開放は三中全会に始

いた。これから本格的に近代化を進めるぞ、と宣言したわけだ。そして十二月の三中全会で、階級闘争を要とするとする毛沢東の頃からのスローガンの使用を果敢に停止し、政治路線、すなわち基本政策を、階級闘争から経済建設に転換した——これが八一年の共産党の歴史決議に書かれてある正史だ。

だが于光遠によれば、活動の重点を移すことが政治路線の転換だとは、当時誰も認識していなかった。胡耀邦も含めて。調べてみると、華国鋒の演説も三中全会のコミニケも、活動の重点を何から社会主義近代化建設に移すのかと言えば、林彪や四人組の残党を一掃する大衆運動からだと言っていた。そして階級闘争を要とするというスローガンは、実は三中全会の後も暫く使われた。

目から鱗が落ちた。考えてみると、三中全会では、代表的な改革政策とされる農家生産請負制を許さないと明言していた。さらに調べると、人民

まったと信じて疑わなくなった。よく考えてみると、その意味もはっきりとわからないのに。

以上の話から得られる教訓は多々あるだろう（サブティカルは大事だ、とか）。だが、今回この話を長々と書いたのは、最近、中国に関する頑迷な思考上の枠が日本社会で形成されつつあるような印象を受けるからだ。

例えば、「自由で開かれたインド太平洋」(FOIP)という言葉を聞くと、すぐ対中包囲網や封じ込めを連想することはないか。実はFOIPには戦略と経済協力の二面があり、米国が力点を置いているのは前者だが、日本が強調するのは後者だ。そのことを正しく認識していないと、誤報が生まれ、誤解が定着してしまう。

世界は日中が喧嘩ばかりしていると思いついでいる。だがFOIPは中国にも開かれている。習近平氏はCPTPPへの加入を積極的に考えたと表明済みだ。安倍前総理が条件付きではあるが、一帯一路に協力できると語ったように、習氏には日本の提唱するFOIPにも協力できると言っている。その一言は、地政学に支配されようとしている国際関係の基調を変え、インド太平洋のすべての国から歓迎されるに違いない。

そんなことは無理だと思いませんか。今こそ、皆が思想を解放し、事実に基づいて複眼的に考えることが求められている。思い込みは禁物だ。

東京大学公共政策大学院教授